

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

|   |                   |
|---|-------------------|
| 論文提出者氏名   | 蒋 建偉              |
| 論文題目  | 会沢正志斎における「神儒一致」思想 |
| <p>審査要旨</p> <p>後期水戸学を代表する会沢正志斎は、その盛名にもかかわらず、まとまった全集すら刊行されたことはなかった。著者は本論文で、広く会沢の著作に目を通したうえで、会沢の思想の構造分析を試みている。一般に後期水戸学と言えば尊王攘夷思想や国体論ということで片付けられがちであるが、著者はそのような予見にとらわれず、会沢の思想文脈に沿ってその思想体系を把握しようとした点が評価できる。</p> <p>まず著者は、神儒一致論が会沢の思想の中核にあることを述べる。そしてその性格を検証するために、儒学否定者の国学の本居宣長に対して、会沢が加えた批判を検討する。著者はそこで会沢が「教」の肯定と否定をもって自己と宣長の決定的な差異としていること、その「教」に儒学の意義を見出していることを指摘する。会沢は性善説の立場を取り、これは人間の自然な心性に信頼を置く宣長や、徹底した性善説を説く朱子学とも表面上は類似しているが、先天的である性の議論に泥むことには消極的で、むしろ後天的な習を慎む議論の方に力を入れるところに会沢の特色があると筆者はする。</p> <p>会沢は宣長のみならず、市川匡麿や沼田順義の議論も論難して、国学、儒学の両方の偏りをともに批判したが、それでは会沢の最大のよりどころは何かというと「天祖」である。この「天祖」に水戸学では複数の神格を当てていたが、会沢が初めて天照大神に限定したことを、著者は種々の資料をもとに確認する。会沢はこのような操作によって、人々の眼を、天皇を通じて天祖という一点に集中化し、天照大神の瓊瓊杵尊に対する三種の神器の伝授と、それにまつわる二つの神勅がクローズアップされるようにしたというのである。ただ著者は同時に会沢が、天照大神以外の神格にも相応の意味を見出そうとしていたことも、「古詩十二首」を通して明らかにする。そこで会沢は国常立尊、天御中主神などを後退させ、高皇産霊尊を天照大神と同列にならないようにし、更に神々にそれぞれの職掌を見出し、それが子孫に継承されたとすることで家職の概念と結びつけ、大嘗祭に象徴される忠孝一致の構造の淵源としたと著者は見る。</p> <p>ついで著者は会沢の祖宗・名賢祭祀論を取り上げる。会沢は、祖宗祭祀の意義は人心統一にあり、名賢祭祀の方は風俗磨礪、人心興起に効果があると考えていたとする。もともと忠孝一致というものはあくまでも血縁関係の存続を前提とするために、それからはみでる存在にはそれを該当させづらいという事態が出てしまう。これらの祭祀の主張は、それに対する一つの解決策という面もあったということも指摘する。</p> <p>なお著者は、会沢の神儒一致論が、基本的には記紀神話において黙示的に展開された人倫の姿を、儒教の言語によって顕在化することを図ったものでありながら、日本特殊の道を語ったのではなく、普遍的な国家のあり方の提示の試みであったとするが、これに対しては一部の審査委員から更なる説明が必要ではないかとの意見も提出された。</p> <p>ところで会沢といえば国体論で有名であるが、彼の主著の『新論』では国体論は「明忠孝」(上)、「尚武」(中)、「重民命」(下)で構成されていて、多くの会沢論は前二者のみによって会沢の国体論を論じてきた。著者はこの三者があくまでも一体であることを強調し、今まで等閑視されてきた「重民命」に光をあてる。会沢は、天祖が民の衣食の源を開き、歴代の天皇がそれを継承したとし、衣食を天祖と民を結ぶ紐帯とする。また著者はこれらの議論の分析から、会沢には「生」</p> |                   |

氏名 蔣 建偉

の尊重が現れていることを強調する。更に著者は会沢が民生ではなくわざわざ民命という語を使用したことに注目し、先行例なども調査しながら、会沢の場合には『書経』の用例が念頭にあり、会沢の民命には、民の生命と天命という両義が含まれていると見る。それでは当時の民命が保証されるために会沢が何を要求したかという点、『易経』をもとにした「理財」と「正辞」なのである。辞を正すことは秩序の整備となり、それは分業を機能させる。その際に制度とリンクした節約を会沢は求める。会沢は、節約をそれぞれの身分に応じた形にすることによって、身分差による労佚の不平等の是正がなされるとした。国体の全体組織は、精神的問題と民生の両面にわたって機能しなければ意味を持たなかったのである。なお著者は会沢の攘夷論にもこの民命論が色濃く反映しているとする。会沢は、夷狄は当初は民に利益をもたらすように見えるが、その統治は結局は民命を害するに至るとするのである。そして会沢は晩年に「時務策」で徳川慶喜に攘夷から開国に転ずるように建言したが、これはよく言われるような転向ということではなく、彼の民命重視からすれば自然な変化であったと著者は考える。

とかくファナティックな思想家として見られがちな会沢の思想が、強い体系性と鋭い現状認識を持つことを、豊富な資料によって解明しようとした著者の試みについては評価できる。特に会沢の思想において「性」や「道」以上に「教」が大きな意味を持ち、その「教」の内容に神儒一致を込める思想構造の解明、また彼の国体論が民生を含めた当時の現実の課題を解決するための体系的秩序論としての面を濃厚に持っていたことの指摘は貴重であろう。また著者が分析した会沢の「教」は、従来から議せられている徂徠学や朱子学からの影響と会沢の思想の独自性との関係を解く手がかりとしても注目に値しよう。

ただ本論文は、会沢の全貌を論じきったとするには、まだ不十分な点も残っている。例えば水戸藩は御三家としての自覚と長い海岸線を持つことから、当時までに既に相当の海外情報の収集を行っていた。更に会沢の『新論』の中の「虜情」などの部分は、今は取り上げられることは少ないが、当時の読者の関心事の一つであった。これらのことから、彼の海外認識の内容の具体的な分析も求められよう。また会沢の宣長批判については、一連の国儒論争の中でのより明確な位置づけも必要であろう。更に儒家神道との関係についても論述がほしいという審査員からの要望もあった。ただ今回の論文は会沢の思想の構造と内容の分析を中心にしたものであり、本論文はこの点に関しては確かな成果を挙げているので、朱子学、徂徠学、儒家神道などとの関係をも含めた思想史的位置づけの試みは今後の課題としてよかろう。

このように若干の課題は残るが、会沢の神儒一致の内容を多角的に検討したうえで、その特質と体系性を明らかにしたことについては確かな意義があり、学界を裨益するものである。

以上から本論文が博士学位の授与にふさわしいものと判断する。

|          |               |        |           |            |
|----------|---------------|--------|-----------|------------|
| 公開審査会開催日 | 2017年8月1日     |        |           |            |
| 審査委員資格   | 所属機関名称・資格     | 氏名     | 専門分野      | 博士学位       |
| 主任審査委員   | 早稲田大学文学学術院・教授 | 土田 健次郎 | 中国思想・日本思想 | 博士(早稲田大学)  |
| 審査委員     | 早稲田大学文学学術院・教授 | 吉原 浩人  | 日本宗教思想    |            |
| 審査委員     | 慶應義塾大学文学部・教授  | 山本 正身  | 日本近世思想    | 博士(慶應義塾大学) |